大台ヶ原の野鳥

Ｔ・Ｍ

４月から５月にかけての大台ヶ原は，ここで繁殖する野鳥たちでにぎわってくる。樹々の若葉もあざやかで，バードウオッチャーが待ち望んでいた季節の到来である。

早朝，朝霧が立ちこめる登山道をゆっくりと進んでゆく。間もなくして聞こえてくるのは，メボソムシクイとルリビタキの歌声である。メボソムシクイの声そのものは冷涼とした単調なリズムで，ルリビタキのそれは楚々としてやや哀調を帯びているが，両者の歌声がミックスされるとすばらしいハーモニーで，鳥たちのコーラスの基調を担っているように思われる。樹木から発散される精気に包まれて，鳥の声を聞いていると，いつの間にか日々のストレスは消え去り，自分らしさを取り戻せるのである。

渓流のせせらぎの音に競うように聞こえてくるのは，ミソサザイの細くテンポの速い金属的なさえずり。なわばりの中のいくつかのポイントを移動しながらさえずり続けている。

撮影するには，予め，絵になりそうなポイントに焦点を合わせておいて，そこにミソサザイがやって来るのを気長に待つだけ。

４０分ほど待ち続けてやっとファインダーに姿をとらえ，望遠スコープ付きビデオカメラのスイッチを入れるが，録画できたのは１０秒足らず，すぐに別のポイントに移ってしまった。

渓流沿いではオオルリの声もよく耳にする。この鳥は高い樹の頂で鳴いているので，比較的見つけやすく，また，割に長い時間，一箇所でさえずり続けるので観察しやすい。のびやかなオオルリの声は聞く者をすがすがしい気分にさせてくれる。

（大台ヶ原のミソサザイ）

一帯を覆う原生林に棲息するコマドリの声も，時折聞こえてくる。遠くから響いてくるコマドリの声は，風情があってよいものだ。

コマドリはどちらかといえば，ややうす暗い渓流沿いの地表近くを生活の場としており，警戒心が強くてなかなか姿を見せてくれない。コマドリのりりしい姿を撮影できるのはいつのことだろう。

宴の時が過ぎ，育雛の時期になると，あれほどにぎやかだったさえずりもあまり聞かれなくなる。食欲旺盛な雛たちの餌探しで忙しいのだろうか。

ただ，託卵性の鳥たちは６月中旬を過ぎてもまだ鳴いている。

ホトトギスやジュウイチのせっぱ詰まったような声，遠方からのどかに響いてくるツツドリの声，カッコウの声も一度だけ耳にしたことがある。

子育てを他人任せにして暇があるのか，それとも仮親に育てられている雛に，実の親はこっちだよと呼びかけているのか。

募集：「市民の意見」への，皆さんの投稿をお待ちします。